

概説

本研究の目的は、江戸更紗の伝統工芸士と彼らと一緒に働いている人たちの現状を調査するものである。江戸更紗がつくられているすべての工房は、東京都を流れる神田川、隅田川、多摩川沿いに位置している。これらの河川では、1955年頃まで川の水質が汚染されていなかったため、川で洗いの作業が行われていた。川の近くに染色をする工房があるのは、染色の作業に質の良い水が欠かせないのに加えて、川が物資や原料などを運ぶことにも利用されていたからである。

リチャード・セネットは「不安な経済 漂流する個人, 2009」のなかで、現代の社会で職人が必要とされるのは、自らの信念に基づいて非常にすぐれた品質のモノをつくっているからである、と述べている。ほとんどの職人は、期限までに間に合うように最大限の努力をして仕事を完成させる。セネットは、こうした職人、ならびに職人の技能というのは、資本主義経済のなかで巻き起こっている雇用不安に打ち勝つことのできるものである、というようにも述べている。現代の資本主義は、知性と柔軟性を強めていく傾向にあるが、実は、世の中がそうなるにつれて専門的な知識や特殊性が損なわれていく、といった逆の動きが生じている。そうしたなかでも、手作業で何かを丁寧につくる仕事は、品質の価値を保ち続けていくために必要とされる。筆者は、江戸更紗が展示されている場所、祭などの行事や染色体験授業の現地調査に出かけてみて、セネットがなぜそのように主張するのかかわかった。従って、江戸更紗の伝統工芸士が携わっている仕事の内容をみることは、他の分野の職人にとっても良いモデルになる。

過去20年のあいだに、江戸更紗の伝統工芸士の数が激減しているものの、現在3名の現役の伝統工芸士が、けたはずれに高いレベルの仕事をしている。こうして、働く彼らの仕事の内容を詳しく知るために、江戸更紗の伝統工芸士、東京都染色工業協同組合、児童生徒に対する伝統的教育事業についてヒアリング調査と参与観察を実施した。江戸更紗がつくられている工房の規模は、家内制工業、もしくは中小企業に入るが、江戸更紗の伝統工芸士と彼らと一緒に働く人たちは、連携のとれた仕事をして数多くの賞を受賞している。その結果、他の競争相手よりも質の高い活動と仕事をこなして、東京都に貢献している。他の職人、児童もそうした働きかたから、さまざまなことを学ぶ。概していえば、彼らが築きあげてきた功績は、手づくりの工芸品をつくって、販売したいと思う人たちの大きな励みにもなっている。